『魔女ロイス』に見る集団妄想の恐怖

中　村　美　絵

身を切るような寒風の吹きすさぶ中、異国の見慣れぬ風景を不安気に見つめる一人の少女。物語は、冒頭の部分から怪し気な雰囲気を漂わせ、やがて読者を不思議な世界へと引き込んでいく。

史実の魔女狩り事件を題材とした『魔女ロイス』("Lois the Witch ") は、エリザベス・ギャスケル (Elizabeth Cleghorn Gaskell)、1859年の作品である。

物語は、ヒロイン、ロイス・バークレイ (Lois Barclay) が、アメリカの港に降り立つシーンから始まる。イギリスの牧師の娘、ロイスは、両親の死後、母方のおじを頼ってアメリカに渡ってくる。ロイスを暖かく迎え入れてくれたおじの死。そして、その遺族との生活。ロイスを取り巻く環境は、決して穏やかなものではなかった。それに追い討ちをかけるように勃発する恐ろしい魔女狩り事件。ロイスは、偽りの証言により捕えられ、ついには絞首刑に処せられる。ほんの小さな原因に様々な要素が組み合わさり、次第に大きな事件へと発展していく過程と、無実の人々を陥れる集団妄想の恐ろしさが巧みな構成と、生き生きとした筆致で、表情豊かに描かれている。

この作品は、1692年に、アメリカのニューイングランドのセイラム (Salem) で実際に起こった魔女狩り事件を取り扱っている。セイラムの魔女狩り事件は、罪のない人々を妥当とは言えない裁判にかけ、数多くの犠牲者を生み出した、恐るべき事件である。26人の女性と6人の男性が死刑の判決を受け、魔女狩りが終結をみるまでに、19人の男女と2匹の犬が絞首刑にされ、2人が獄死し、黙秘権を行使した男性1人は拷問により圧死した。魔女狩りの終結時には、55人が魔法使いであることを自白し、150人がまだ、監獄につながれていた、と伝えられている。

セイラムの魔女狩り事件は、少女達が奇妙な発作を起こすことから始まる。

泣きわめいたり、けいれんを起こしたりする、という原因不明の発作である。現代医学で考えるならば、「ヒステリー」、あるいは「神経症」という病名が与えられるようなものなのであろう。しかし、当時はまだ、こうした病気が発見されてはいなかった。そのため人々はこの発作を、「魔女にとりつかれている」とか、「魔女のしわざ」としか判断することができず、それが恐ろしい魔女狩り事件をひき起こす発端となったのである。

それでは、なぜ少女達がこのような発作を起こすようになったのであろうか。この少女達の発作の引き金となったのは、いわゆる「恐怖物語」であると言われている。ギャスケルの『魔女ロイス』の中にも、恐怖物語を楽しむ場面が幾つか見られる。まず最初は、ロイスがおじの家を訪ねる前に逗留したスミス家での食事のシーンに登場する。食事のだんらんのひととき、皆はかわるがわる話を聞かせ合う。こうした場合には、やはり恐怖物語が喜ばれるようである。ロイスも、幼い頃の恐怖体験を語る。

子供の頃、ロイスはある恐ろしい光景を目撃する。人々から魔女と呼ばれている人が、池に入れられ、石を投げつけられたりして責められているのだ。そしてこの時、ロイスはその女性から呪いの言葉を投げかけられる。その内容は、「牧師さんが私を助けてくれなかったから、牧師の娘であるお前が魔女として捕まっても誰も助けてくれないよ」というものなのであるが、その言葉が今でも耳について離れない、とロイスは語る。実は、この場面が、後にロイスを待ち受けている恐ろしい運命の伏線となっているのである。

現代と違い、娯楽の少なかった時代に、恐怖物語を楽しむ傾向が今以上に強かったであろうことは想像に難くない。敬虔なピューリタンの家庭に育ち、禁欲を要求される毎日を過ごしているセイラムの少女達にとって、恐怖物語は、特に魅力的なものに感じられたことであろう。『魔女ロイス』には、ロイスのおじの家、ヒクスン家の召使いのナティが、台所で、ロイスをはじめとする少女達に血も凍るような物語を話して聞かせるシーンが出てくるが、史実の場合も、こうした集まりがしばしば行なわれて、その興奮や緊張や罪悪感が思春期の少女達の不安定な感情と結びつき、奇妙な発作を生み出すに至ったと伝えられている。

しかし、ただそれだけならば、この事件はあれほど大きくはならなかったに違いない。事件を拡大する社会的背景があったのである。1692年のセイラムの人々は、実に様々の点で困窮していた。どのような点で困窮していたのかを次に列挙してみよう。

重税に苦しんでいたこと。不作であったこと。インディアンの襲撃におび

やかされていたこと。政治的には、植民地が自治的性格を失ってしまったこと。対外的には、フランスと不穏な関係にあったこと。内部では、村落の土地所有権と境界線の問題で内輪もめをしていたこと、等々…。

当時、セイラムは、非常に多くの問題に悩まされていた。そして、こうした多くの困窮の原因を「魔女のしわざ」に求める思想を普及させた人物がいた。それは、コットン・マザー・ミルズ (Cotton Mather Mills) という名のピューリタンの牧師であった。当時、キリスト教の様々の宗派の人々が魔法や悪魔の存在を信じていたと言われているが、特にピューリタンはその傾向が強かったと伝えられている。

歴史的には、こうした大事件を生み出すに至った理由が数多く挙げられる。しかし、『魔女ロイス』には、これらの外的な事情はそれほど強くは語られていない。それよりもむしろ、「心の問題」の方に着目している。集団妄想を生み出すに至った、人それぞれの「内面の問題」に目を向けているのである。現代と異なり、精神医学が発達しておらず、医学的にも、心理学的にも多くを解明されていないヴィクトリア朝に、ギャスケルがこの事件を「心の問題」として取り上げたことは、注目に値する。

それでは、この作品は、どの程度史実に基づいて書かれているのであろうか。この事件に関する資料をひもとくと、『魔女ロイス』は思いのほか虚構の部分が多いということがわかってくる。登場人物も、作品中で展開される様々な出来事も、そのほとんどが作者の創作によるものである。しかし、物語が全く史実から離れてしまっている訳ではない。ギャスケルは、丹念に克明に史実の事件を調査し、事件の発端、原因、誘因、登場人物の行動や動機、魔女裁判の様子、等、実に巧みに史実を取り入れている。社会的背景、歴史的背景をしっかりと把握した上で、架空の人物を使って事件を再構築しているのである。ギャスケルの卓越した描写力は、物語に信憑性を与え、事実以上に事実らしく見せることに成功している。史実ではあまり語られない人々の心の機微を描き、登場人物の心理状態を浮き彫りにした結果、説得力という点で史実をしのぐ作品ができあがったのである。

歴史的一事件として見た場合、セイラムの魔女狩り事件は、昔の、ある特定の場所に起こった特殊な事件のように思われがちである。しかし、現実には、特殊なものではなく、どこにでも起こりうる事件であり、誰もがその加害者となる危険性を持っている、ということをギャスケルは訴えたかったのではないだろうか。そのために、全く実在しないロイスという少女をヒロインにして、全く新たにこの事件を書き換える必要性が生まれたのであろう。

「集団」の持つ力は、はかりしれないものがある。魔力と言ってもさしつかえないであろう。支持する人々の数は、往々にして判断の基準を狂わせる。本質的な正しさの基準はどこにあるのであろうか。正しい判断の基準は何によって決定されるのであろうか。人数は必ずしも物事の正否を示しはしない。真に正しい判断をくだせる者達によってでなければ、多数決は正しい答えを引き出せはしない。大多数の構成人員が判断を誤った場合、その社会はいかなる運命をたどっていくのであろうか。一つの集団が誤った方向に進んでいった場合、一体どのような結果を招くのであろうか。その恐ろしさをこの作品は訴えている。集団の中に属していると、客観的にその集団の状態を見ることが難しくなってくる。流言蜚語に惑わされたり、利害関係に心が捕われ正しい道を見失ったりすることもあるだろう。ギャスケルのするどい洞察力や観察眼は、人々の陥りやすい罠をものの見事に描出している。善と悪が紙一重の位置関係にあることを示しているのである。

『魔女ロイス』の中の、ロイスが教会堂で告発され、捕えられる場面には、集団ヒステリーの状態がよく表わされている。息苦しいほど大勢の会衆で埋まった教会堂には、人々のどよめき、金切り声、罵声が響き渡っている。牧師コットン・マザーの迫力ある言葉。その恐ろしいほどの説得力は、まるで人々を集団催眠にかけているかのようである。セイラムの人々でなくとも、こうした興奮のるつぼと化した集団の中にいて、冷静さを保つことは難しいことであろう。集団の中で、一人の興奮が他の人の興奮を引き出し、他の人がまた別の人の興奮を引き出し、お互いがお互いを影響し合って、異常な心理をたかめ合い、集団妄想を形成していくのである。

この作品で、ギャスケルは、集団妄想の恐怖を訴えているが、その他にも一つ、力をいれた点がある。それは、主要な登場人物の心理を克明に描きあげるということである。集団の力の恐ろしさの原因を、集団の持つ魔力だけではなく、集団を形成する一人一人の心の中に見つけ出したのである。

純真で心優しいロイスがなぜ、告発され、処刑されなければならなかったのか。ロイスを救う者が、なぜあらわれなかったのか。ギャスケルの人間心理探求のメスは、これらの疑問を、説得力をもって解明していく。

それではここで、『魔女ロイス』の主な登場人物に目を向けてみよう。主な登場人物とは、ヒロインのロイスとヒクスン家の人々、合わせて５人である。ロイスのおじは、ロイスをこころよく迎え入れてくれるが、ロイスの到着後まもなく病死するので、ここでは省略する。

まず、おじの妻である、グレース・ヒクスン (Grace Hickson)。厳格でプ

ライドの高い婦人である。次にヒクスン家の長男マナセ（Manasseh)。もともと情緒不安定なところがある人物である。神のお告げと称して再三ロイスに結婚を迫り、ロイスを悩ませる。ロイスには、イギリスに心を誓った恋人がいるのである。ロイスの恋人は、やがて、イギリスからロイスを迎えにやって来るが、悲しいことに、それは、ロイスがすでに処刑された後のことであった。それでは次に、ヒクスン家の長女フェイス（Faith）を御紹介しよう。ノウラン牧師への片思いのためか、表情にかげりのある少女である。ロイスと年令も同じ位で、はじめは仲良くしている。しかし、やがて、ノウラン牧師とロイスの仲を疑うようになり、嫉妬に狂って、持ち前の冷静さを失っていく。主要な登場人物の最後は、ヒクスン家の末っ子、プルーデンス（Prudence）である。プルーデンスは自己顕示欲が強く、わがままで、人の不幸を喜ぶような情緒的欠陥を持つ少女である。

それでは、ヒクスン家の４人について、心の動きを追ってみよう。

最初にグレース・ヒクスンについて考えてみたい。グレースはロイスのことを疎ましく思っているが、敬虔なピューリタンであり、世間体を気にする人でもあるので、心情はどうであれ、自分の子供達とほぼ同等の待遇をロイスに与えている。ロイスに優しく接してはいないが、虐待もしていない。長男マナセがロイスとの結婚を望んでいることを知り、初めは猛反対をする。しかし、マナセの精神状態がますます不安定になっていくのを心配して、次第にその態度を軟化させていく。子供達を溺愛しすぎて子供達の性格をゆがめているが、母親らしい感情を持った人物ということはできるであろう。特に、作品の後半で、マナセの精神状態を心配するあまり、独房にロイスを訪ね、この厳格で傲慢な婦人がロイスの足許にひざまずいてまで、マナセにかけている魔法をといて正気に戻してくれ、と懇願している。この場面は、母親の心情を良く表わしている。

次に長女フェイスについて考えてみよう。本来ならば長男マナセの順番なのであるが、ヒクスン家の中でマナセだけ他の３人とは別の立場をとっているので、最後に説明することとする。長女フェイスは、本来は冷静に物事を判断できるタイプの少女である。最初に魔女として告発された女性の助命嘆願書を書いたりする、判断力も優しさも充分に持ち合わせている人物である。しかし、恋するノウラン牧師とロイスの仲を疑い始めてから、その性格の良い部分が次第に失われていく。嫉妬とねたみに満ちたフェイスは、ロイスの危機を救ってくれようとはしない。

次に、末っ子プルーデンスについて考えてみよう。プルーデンスは激しや

すい性格の子供に描かれている。また、自己顕示欲の強い少女でもある。最初に発作を起こした子供達が、世間の注目を浴びていることをうらやましく思っている。また、母親が禁じていたにもかかわらず、魔女の処刑を見に行こうとしてロイスにたしなめられ、ロイスに反感を抱いている。これらが動機となって、会衆の面前で発作を起こしてみせ、ロイスを告発するに至ったと思われる。

最後に、長男マナセについて考えてみよう。マナセは、この異常な集団妄想の中にあって、唯一人他の人とは全く違った行動をとった人物である。もともと情緒不安定なところがあり、心のよりどころを宗教に求めているが、マナセの場合は、信仰がかえって精神不安定を助長させているようである。現代医学で診断するならば、マナセは、幻覚や幻聴を伴う何らかの心の病にかかっていると思われる。マナセが見る幻は、ロイスと結婚せよ、さもなくば不幸が訪れる、と告げる。この幻は、本当の神のお告げではなく、マナセの心が作り上げた幻影と思われるが、不思議なことにこの幻のお告げは、現実のものとなってしまう。マナセは、ロイスをかばった唯一の人物である。しかし、人々がそれを、ロイスの魔法のせいと思い込んでしまったため、マナセの情熱的な弁護や説得は、ロイスの立場を一層悪い方向へ持っていく結果を生んだだけであった。狂人と言われながらも、この正気であるはずの加害者集団に属さず、最後まで自分自身の心を貫き通せたマナセに、より深い人間性を見、また、物語の最後で、処刑台にのぼりロイスの遺体を抱きしめてキスをし、その後暗い森へと走り去った姿に、一種の救いのようなものを感じたのは、私だけだったであろうか。

正常であるはずの人々よりも、狂ったと言われている人物の方が、より的確な判断をすることができたという点に、どのような状況にあっても、人をあなどることなどできないのだ、というギャスケルの風刺を見ることができる。

以上、ロイスを除く主要人物の心理を追ってみた。今まで述べた４人のうち、マナセを除く３人の人物、グレース・ヒクスン、フェイス、プルーデンス、について総合的に述べてみたい。

この３人は、いずれも極悪人ではない。個性が強く、また多くの欠点を持ってはいるが、ごく普通の人々と言ってさしつかえないであろう。しかし、いずれも皆、魔女狩り事件を起こした異常集団の構成人員となる。

この作品は、悪人の悪ではなく、どこにでもいる平凡な人々の心の中の悪を描いている。人々の心の中に潜む悪い種が芽を出し、大きく育っていく様

を描いている。それぞれの心の中で育った悪が、互いに影響し合い、呼応し合って、さらに大きな悪を作り上げていくのである。これは、裏を返せば、集団の中の一人一人の責任がいかに重いか、どうすればこうした事件が防げるかが述べられていると言えるであろう。一人一人の自覚、一人一人の公正な判断以外、救う道はないのである。

さて、ここでロイスの心理描写について考えてみたい。告発され、捕えられてからのロイスの心理状態が非常によく描かれている。茫然自失の状態に陥ったり、正常な思考力を取り戻したり、恐怖や不安感に襲われたり、悲嘆にくれたり、かすかな希望を抱いたり、とロイスの心理状態はめまぐるしく変化する。ほとんど救いのないようなこの物語の中で、ロイスが処刑の前日に到達した精神的なやすらぎに、わずかな救いを見ることができる。処刑の前日、ヒクスン家の召使いのナティが、ロイスの牢に入れられて来る。ロイスともども絞首刑を翌日にひかえ、ナティは心の動揺を抑えられない。このナティを優しく慰めながら、ロイス自身も平静さをとり戻し、やすらかな心境に到達する。冷たい牢の闇の中で、迫りくる死の恐怖と闘いながら、人に愛を与えることで、自らも救われるこのシーンに、ギャスケル精神の源流とも言うべき、至高の愛の精神を見ることができる。

こうした内容の作品は、ともすれば感傷的に描かれがちなものであるが、ギャスケルは極力感傷を排して描いている。薄幸の少女ロイスは、どこかたくましさを備えている。苦しい環境の中でも人には日常の生活がある、というギャスケル自身が自己の体験から獲得した信念が、物語の中でロイスを自然に活動させ、日常生活を生き生きと送らせている。そして、読者に、物語の中で時が動き、人々の生活が営まれている実感を与えてくれている。大きな事件を扱っているため、起伏が多く、変化に富んだ内容ではあるが、その中に、着実に日常生活が描かれている。ロイスがその時代のその時を生き、日々の生活を送っている様が描き出されている。監獄に捕えられている時でさえ、日々の生活、といったものが感じられるのである。

この作品においては、生活感が重要な意味を持っている。この生活感を感じさせるということ、実感を感じさせるということが、この作品に現実性を持たせているのである。妙な言い方であるが、ほとんどフィクションでありながら、リアリズムに徹した作品であるということが言えるであろう。

参考文献

Gaskell, Elizabeth Cleghorn. "Lois the Witch." *The Works of Mrs.*

Gaskell, 8 vols. 1906 ; rpt. New York : AMS Press, 1972, vol. 7, pp. 110-208.

Sharps, John Geoffrey. *Mrs. Gaskell's Observation and Invention ; A Study of Her Non-Biographic Works.* Fontwell, Sussex : Linden Press, 1970.

Lansbury, Coral. *Elizabeth Gaskell ; The Novel of Social Crisis.* London : Paul Elek, 1975.

Easson, Angus. *Elizabeth Gaskell.* London, Boston and Henley : Routledge & Kegan Paul, 1979.

Duthie, Enid L. *The Themes of Elizabeth Gaskell.* London : Macmillan Press, 1980.

Boyer, Paul and Stephen Nissenbaum, ed. *The Salem Witchcraft Papers ; Verbatim Transcripts of the Legal Documents of the Salem Witchcraft Outbreak of 1692,* 3 vols. New York : Da Capo Press, 1977.

Kerr, Howard and Charles L. Crow, ed. *The Occult in America ; New Historical Perspectives.* Urbana and Chicago : University of Illinois Press, 1983.

Guiley, Rosemary Ellen. *The Encyclopedia of Witches and Witchcraft.* New York and Oxford : Facts On File, 1990.

K.バッシュビッツ「魔女と魔女裁判——集団妄想の歴史」(川端豊彦、坂井洲二訳、りぶらりあ選書) 法政大学出版局1977

絓川恭「魔女の世界——セイレムの魔女」(講座アメリカの文化１) 南雲堂1969

加藤恭子「最初のアメリカ人—メイフラワー号と新世界」福武書店1983

清水博「アメリカ合衆国の発展」(世界の歴史17) 講談社1978